



南總里見八犬傳第七輯卷之七

東都

曲亭主人編次

第七十二面

仇を謬く奈四郎頭顱を喪
客を留く次團太鬪牛小誇る

却説四守の城を還りて元元宣をうら指月院の執り住持の凡
僧を知らし國中の士民渴仰して活菩薩と稱するの虚名ありあ
り況彼二天士の面魂實一人當千の勇士之渠意を固とある勤仕を
推辞むとも間々時々物を贈りて日月之恩を積まの竟心傾け當家の
隨後まきとわらん就て木二作が後家夏引のりる良人を害せしめあ
密夫奈四郎が木二作を殺せしむるを隠して悪事之次負けのれ良
害せしめたる當の嚴科より又奈四郎が後僕帳内も月比主の悪を次負

松中
瑞善院

けく次罪竊殘刃心せざるを。これ亦頭を刎るのみ。只彼木三作が小厮出来
ぬ。奈四郎夏引ホが悪事を知ると、魚骨く夏引ホ謀れ、信乃を誣んとする
の。夏引ホの罪非軽重ありて、夏引ホと同様の渠の二百鞭ちて國境より追
放てよとの餘の言。如此々々と言拔ゆひ、元元これを奉ず。形を以て行ひ
は、夏引内ホの身首処を異せし戸を市に垂せられ、餓る狗を肥せし隠
匿の報ひ怖るべし。程の猿石の村の故老の百姓ホの元元の下知を受けて木三
作が亡骸を村人解し、指月院に送りまされ、大法師受てり。この宵火
葬のときける登時信乃道節照文ホの木三作が死後、名迹を件の百姓們と
商量し、親族の子と、猿石の鄰村の四六城氏の百姓あり、則木三作が養
父より五世前に分れる血脈相續の氏族されども、今この疎遠なる四六城
氏、二箇の男子あり、次男の才ありて、文筆を好み、その長者、二犬士

照文ホ、路姫の云云と、それらのよと告まう。木三作が白骨を半分
ち、その一壺と四六城の香華院へ葬らめ、即便鄰村の四六城氏の三男、
木三作が名迹と、約束され、故老の百姓們が媒妁し、件の三男を
呼び迎へ名を木三作と更せ、養父の家を嗣けり。この前の木三作は、仕へる奴婢
杵人ホも、又後の木三作は、役多の家の、栄をり、是より先、道節信乃ホとの
宵、大照文ホ相譚、姫への情願、縛十二分成就、これこの地の逗留、
何とされ、國主信昌の士を愛する、良おの俺們を留ん、為の懸、
思ふ、その因、意、小悪、難、
は、
必後悔あらんとす、大照文ホ異議、及び、
今より起行の準備をせんと、思果、
照文を道節急小

とく媼内と商量せり。媼内は頭を傾け、近属両管領の没落せしより、鎌倉の兵火は荒れ、昔の鎌倉は陸奥の富栄の諸侯の城下より、れは世渡り便著るるを、奥多の大崎殿の御内人共、僕が故主あり、彼処へ赴き、と真実を薦め、奈四郎の謀の後、その十一月の廿二日、三四日の比、ありけん八王寺の客店を朝未明、立出、ゆき、路を急ぎ、登時、媼内の肚裡より、彼身の悪支、發覺、れて、落人となり、主の後、跟陸奥三鬼、伶傳、さも、ゆき、頼、く、る、を、甲府に在り、時、ふ、主、後、と、い、れ、し、ま、り、る、の、面、々、の、蜂、を、拂、き、優、工、を、一、日、暮、宿、所、の、小、篋、等、を、金、を、選、り、と、い、ふ、を、盤、纏、不、足、り、け、り、と、人、家、遠、所、中、に、結、果、と、金、を、思、合、る、と、も、落、人、な、れ、出、崇、も、お、ど、り、分、別、を、思、合、る、臍、を、噛、と、も、及、ん、や、け、ふ、と、く、羽、立、哉、過、さ、と、思、心、を、色、も、を、存、を、為、さ、り、氣、を、慰、め、と、い、く、同、國、の、四、谷、の、原、を、

過る程、小下、睡、あり、けり、この地、當時、郊原、の、西南、の、三、麻、河、の、里、の、民、屋、稀、中、に、疎、林、枝、を、ま、え、岐、道、を、く、と、冬、畔、人、を、迷、し、む、既、而、媼、内、の、悪、心、類、り、已、と、死、る、く、あ、を、究、竟、の、処、と、い、ひ、く、四、下、と、い、ふ、人、絶、て、る、り、と、い、ふ、腰、の、帶、に、一、刀、を、引、抜、き、聲、を、ひ、き、背、より、ま、の、懸、で、奈、四、郎、が、隅、に、項、骨、を、け、く、丁、と、破、り、砕、ら、れ、て、苦、と、叫、び、つ、倒、れ、ん、と、く、踏、曲、で、抜、あ、せ、ん、と、い、ふ、處、を、思、合、り、く、け、て、敷、き、刀、尖、の、又、頭、を、破、ら、れ、る、奈、四、郎、怒、れ、る、声、を、き、く、虎、狼、野、心、の、奴、隷、が、敵、對、し、主、を、う、ら、海、の、野、間、を、ぬ、世、を、武、藏、野、の、邊、水、も、終、に、脱、れ、ぬ、身、の、ど、り、天、四、訓、也、と、い、ふ、と、依、傍、に、あ、り、拔、是、る、刀、を、頻、り、う、ち、振、り、く、研、ら、ん、と、進、む、を、物、と、も、せ、む、噫、小、さ、う、死、天、四、訓、呼、り、人、を、殺、せ、ば、又、殺、さ、る、報、ひ、を、か、く、と、い、ふ、お、年、來、の、好、と、虫、木、工、作、を、殺、し、る、業、を、この、世、で、果、さ、さ、る、無、の、口、を、昏、ん、う、り、弥、陀、を、念、じ、て、死、天、の、旅、十、方、億、土、獨、り、覺、期、と、せ、と、不、敵、の、嘲、哂、又、幾、

刀欲砍伏々々十々滅を刺んとま折ら西のさより是方を望まき人影も
 刃をさめく叙次よりと見うへ喰れ奈四郎が懐る財布をさき引出し
 切切をさしうち戴たはさ取れ死ふとも生ふとも要る一寛哩と御座と血
 刀を拭ひ飲む強悪非道何処へいそ稲叢の蔭を目柴に足の向く方を先
 路のけ杖江五田のさ逃亡り然程は犬塚信乃犬山道節の濱路姫を
 送らんとく權く蜜崎照文と相俱して石木の指月院を出より第二の曠
 氏日武藏の四谷まで来まり信乃の宿を討ん為濱路姫の轎子先
 二町人家あるさ急程より先路の枯芒花のほより砍仆される
 旅客あり近づく信乃が足音の忽地小耳あ入りけん發起とまき刀をうち
 振り素奴媪内逃と下と呼りさから敷まんせと信乃の驥が身を反し
 利腕を楚と合さめめく面をあらけと足 泡雪奈四郎 犬塚信乃

此を言語の声の中へ逃んと挿れ奈四郎が刀を奪き破と破る巻の
 牙小要時ゆめさ春をゆめ泡雪が首地上は滾落く消る枯野の草の
 葉を軀の鮮血を浸り浩処は道節照文の轎子をさる野邊ま
 来まり信乃の奈四郎が為体を如此と々と報知と這奴既深瘡を肩ふ
 たる眼も其処は圍きけん某をさ媪内と呼りさ砍らるる刃を奪き之頸撃
 落しぬありこの奈四郎の僕一奴隷媪内傷けられ疑ひる仇をさめ
 みる所も後僕ゆめめすの現積悪の報ひまをさ道節領て彼媪内
 ぬろ路用の金を奪んとく所行りけん奈四郎の尚死さく御邊は首城
 刻られ天の分配定ま妙奈四郎が終る所斯あるとさ奴隷の奈四郎
 主んや悪人さるるとも其を傷けく逃亡る媪内も亦安穩るんや久後想
 像る死のま照文も進寄く這奈四郎の姫との養父木二作の仇



る。ふも甲府を逐電して刑罰を脱きし本意を思食する。圖らむ
 あり。怨を復せし大塚生の功賞を。ゆまの養父の白骨と鯨敵の首級を
 齎して安房へ還らせし。是の優る家果を。いと欲しく。稱へて。云
 云と。姫は報まらば。濱路姫は。信乃が功を感。あつて。蟹崎照文の
 奈四郎が衣の袖を切取。首級を包。親兵の。その宵。二大士共。侶。四
 谷の里に宿り。を投。め。次の日。比。及。黒田河の上。本。あ。け。り。登。時。信。乃。道
 節の濱路姫と照文。別を告。ぐ。ま。は。河を東へ渡。下。總。ゆ。へ。ど
 道中の。を。異。る。某。事。の。処。ゆ。身。の。眼。ど。ろ。一。并。助。の。餘。の。大。士。も。
 索。の。金。く。取。る。合。共。侶。は。安。房。の。到。り。見。参。入。る。れ。と。濱。路。姫。も。照
 文。も。餘。波。を。惜。を。別。を。忍。び。切。て。真。間。國。府。の。臺。の。邊。ま。も。と。放。さ。り
 二大士。後。り。立。去。ら。ん。と。け。れ。照。文。の。已。を。金。一。百。兩。を。さ。り。ゆ。二大士

濱路姫の
 舟會
 父祖舟會
 の舟會
 今具は
 世を看
 察すべし

贈。ま。の。金。の。大。士。の。為。の。某。事。の。ゆ。五。君。の。賜。の。盤。纏。ま。一
 の。受。納。め。後。日。の。所。要。を。用。ひ。と。叮。嚀。の。道。節。沈。吟。と。大。塚。の。何。と
 也。らん。の。金。俺。們。の。賜。の。れ。も。盤。纏。の。物。を。贈。と。推。辞。ま。ら
 在。礼。る。一。自。餘。の。大。士。の。窮。も。あ。る。君。の。恩。を。預。ら。せ。ん。脚。邊。の。ま。の。を。回
 ま。信。乃。も。沈。吟。の。趣。の。理。あり。然。る。一。包。金。を。且。く。預。り。ゆ。ら。ん。と
 応。と。弁。一。額。を。君。恩。を。謝。し。濱。路。姫。の。二。大。士。の。績。を。譽。て。送。別。の
 言。を。勞。ひ。の。れ。照。文。親。兵。も。二。大。士。ま。ら。ち。對。ひ。合。再。會。を。契。り。る。言
 思。濱。路。姫。主。後。の。渡。船。ま。ら。ち。乘。て。前。面。嶋。ま。ら。ち。着。る。二。大。士。の。岸。は
 要。時。立。在。目。送。り。け。り。亦。后。濱。路。姫。の。恙。も。安。房。の。瀧。田。は。還。り。比。大。父
 義。實。朝。臣。二。親。義。成。御。支。婦。と。男。女。の。胞。兄。弟。達。亦。甲。斐。在。り。年。末。の
 生。の。木。二。作。が。大。塚。信。乃。の。妻。の。せ。と。欲。せ。と。信。乃。が。結。髪。の。妻

そのひ さいま 弥生まれば飼料を生平より粉を多くと拵餅を食し。 本日の定むとも 既日本日の定むとも牛の澤よりせんき 蠟種或は油雑巾の幾遍と拭ふ 程は毛色日比十倍と就中黒牛の天鷲絨を包は如く彼羽毛介子せ

よのこ 魚曾國の鬪鶏之想像られては男一は北國の沼習中戸々牛馬の 初冬の比より 明年の二月も皆是厩櫪に用罷られて外は出るのあまこ

まれば 秣は足の氣を養ふ肥太らばのこる況鬪牛はさ上と牛のぬい 物の費も敢厭むを妻子奴婢も牛の為の用心を鍾愛月比は増 たり有此而本日ふなりぬれが厩元を牛共を各々牛菰屋より牽出さる

生るれもその意を欣然と前足を屢大地蹴る奮勇の氣色顯 是る牛は南部の牧より罕中佐渡より地牛の毛色も一るは黄 牛は蒼牛黒白桃花四足白虎文額白牡丹紋の六出様との雜毛もさる

さるゆ 枚舉る子追連ぬ又形體も大小あり 殊有力勇猛との差あれ今 定るべしけれも這回の大牛は逃入村多角連次牛田村多子五右衛門 虫龜村多領本太郎木澤村多榦之助蓬村多艾三郎塩谷村多 幸之助小栗山村の判官八郎が牛八取を抜俗は大関と稱へる只に

のまわねどもいざこれが大畧へ又その村落より出る牛奴を力士と唱へ究 竟する壯少者或は紺染或は花田の山夾衣紺の股引脚絆を穿たぬ又 附融といふを穿たるも又甲も華を盡し或は袴の絳纈 類小或は倉々或は白死縁をさめくさるものも 肚甲大郡内縞絹縹 半の故ら美を盡しと帶踏皮副帶を拭きと風流残上目とせし草 鞋の白紙を締は拵紺の麻索もく短とせし糸の目を暗と装做せし

七八十名もあぬべの中は木澤村多雪車九郎荒屋村多漏右衛門逃

入村多踏四郎小栗山村の毬右衛門。これより宗徒の大力士を合よく牛を
 牯のへ又牛裁判とのありて東西の力士共備争ひを起せと云ふ。此れ必
 ずを和寛くを異小治むるを宗とを牛の夫の名を被けて某村の甲右
 衛門の村の乙八まど呼ぶを地方の習俗と云ふ。彼の甲右衛門の名馬のまど別名つる
 ところ一板隔明日真約を争ふ闘牛の地所を討る。塩谷木澤兩村の境
 節多く逃入荒屋虚木の二个村の合保より其地を借く。當場と云ふ。この
 地へ三方小山の中をの凹小坦然なる。佃圃を借く。絶と云ふ。この遠近なる連
 山の林林列てふ。山も草葉のまど萌出せ。斑消る。遠山の雪小
 霞天引く。春色今もあま。枯結縷草の上は。筵布渡り。出茶屋
 あり。酒舗あり。蕎麥園子煮。漆物餅。駝果子。鴨。只の一日の
 為。このまど。このまど。知。鄰。鄰。郡。の。遠。境。の。老。弱。男。女。も。然。ん

とく。あま。取。多。い。ま。る。の。合。高。元。より。見。あ。る。ま。と。く。岡。は。依。る。能。御。走。抑
 幾億萬人も。宛。宛。塘。渡。る。蟻。小。似。る。彼。牛。裁。判。補。助。人。も。ど。の
 中。小。雜。く。異。あ。る。死。い。れ。を。鎮。む。力。士。外。々。小。隊。を。ま。く。又。看。官。の。中。小。今
 志。只。の。平。坦。の。數。十。間。を。四。下。を。彼。此。と。徇。行。を。久。く。雪。小。閉。籠。が。れる。
 穀。の。牛。の。野。邊。斑。々。一。ひ。の。野。敷。を。れ。く。敵。を。ま。り。その。大。を。ま。り。の。い。高。四
 尺。三。寸。四。五。寸。の。及。ぶ。の。鉢。膝。と。名。つ。け。る。角。の。饒。へ。排。の。縮。緬。或。へ。紅
 なる。圓。統。の。紐。を。の。と。兩。角。を。緘。み。る。の。事。の。為。体。小。目。を。擧。馬。さ。ぬ。り。け。り。
 かく。と。牛。の。期。を。俟。白。折。々。高。く。吼。る。声。物。然。と。く。撞。々。と。り。介。の。葛
 上。盧。ふ。わ。ら。れ。何。と。い。ら。ん。よ。と。知。ら。れ。ど。御。首。を。霞。を。辟。く。彼。淮。南。の。丹。を
 舐。く。雲。ま。入。り。けん。勢。ひ。あり。月。小。喘。だ。一。只。牛。尖。似。る。ま。り。あ。ら。げ。る。海。内。を
 雙。の。壯。觀。へ。扱。角。力。の。光。景。と。衆。牛。の。勝。負。へ。本。日。を。俟。く。ね。て。え。ぬ。へ。り。が

一とつとくく彼回曠垣る闘牛の地所に至ればも取合ひ一先弱男女
 あり日と暗と夜倣く衣の色々々花の如丹楓似て妖艶とく美し
 北國の風土と桃櫻の花さよ又只一時は綻びて彼此は白く
 含む楊柳の糸は遊糸も春景色 鹿児斑は消残は白
 雪も亦愛つる日の雨後の晴天一朶の雲も猛風波は連山波濤
 似る青葱とく蒼蒼あり白あり小尖る時密既し雲霞を龍め硝道
 稍春深し人取寄て岡の高く鳥啼く谷の深を知る寛歩して到る処
 奥あらむとゆるるゆて磯九郎正面多岡の邊は草花を布儲て小文五を
 上座不請登り身傷小扈後に向うて身を長く正首は尉めり
 然程は闘牛の時刻もあはれ村人各々彼紫敷置る牛共を漸く牽
 りて中と送り勝負を決せむとの支の為体今の相撲の土苞入攪組といふは

異なるも且その牛と牛とを闘まると東の某村の右西の甲村の兵衛
 と呼ぶ名告る者官これを知ら初形體巨大な力飽ま猛り
 牛とこれを開し中は大なる又小なる強を弱を前頭を牛と闘し後
 大関小結と唱らる大牛の強勢を闘まると亦是今の相撲の如し既して
 一番二番と勝負を争ふのを終る且東西より牛主各一頭牽りて牛と
 牛と牛と相距あるを間若干力士牛牛を解放し雙方齊一
 奔菟とく角と突合まるあり或は迭は疾視て左右より菟は相遠ること
 数回ありやなく相近つと突状とて額を合し角を膝を推まあり亦牛
 膝を解くとや一俵の角をどと田を鋤た圃を打ぐ大地を敷間敷き進
 むく角を闘る牛もあり又敵とて進みは俄然とて逃るもあはれ大なる牛
 膝を解くとや俵相進むと角を開き牛より逃る力捷れ牛の推

戻一衝返され漸小眼中含血之朱を沃たるもの如く全體より汗を流し
 四箇の角を閉まる音夏々と遠く響えり拵角の勢は怖る又一段ある
 強牛とち組んで離れをされて突くを勢は迅速なり斜に突外を忽地
 眉向を劈かれんとする目危く出せり煨煉と怒つとる就中太牛の脅
 力大象子敵まの角をて投付更角とて突投まてをえり力
 士亦群菟推隔々捷誇でる牛を駐む事及むと柱られが肩牛の膝を
 突れ矢庭の敵死せる一角の鋭きと鋒のどくその勢は並則は似り
 ぐる故の東西の力士七八十名并絶の四方を輪立と聞まる牛の五間十間
 衝然と推ひと突力士も共は辟れ動散る縦横を身は奔走はされ
 勝色を奪牛の力士の貪欲を嗚り推ゆ牛は後只洪波の
 打どくまるとを教之群集の老弱瞬は彼や肩るん既小を弱りなる

と相憐をよ汗を握るの各肩は肩は牛角勝負を争論れは彼
 牛裁判は男東西の力士ははさく高量と牛主と肩の力を和寛
 るを強弱の差ありとよも既小肩色はる牛の忽地角を退外と其奮
 直小逃走と野の力未動揺々と追蒐と捕捕るを柄とをの追不
 正の遅くはと突の逃牛遠く走と郊原田圃の差別を山林嶮岨の嫌
 忌る樹を倒し石を輾ま勢力以名状を況勝牛の力を逐る勇猛奮
 震十倍と當るるもあつたこの技小熟る力士は牛の左右を拘らむ
 横さの衝とあせ角と両は林定と握るの牛の前足をうか足は絡
 まく背尻を拭るも或の牛の後足は推考著死或の尾は推乃で曳れ
 吊れらる駐るもあつたこれも優る大牛の具をせん樹る死と突その牛の罨
 九と両は相引駐れは争うるは怯む処を毛を糾る牛麻糸を雞の羽を

のく自昇融せ鎮らむと云ふ事。有此而絆索を敷き添く人駑と牽
 りて返まよ牛の意氣揚々と勝誇りる驕慢の氣色この時小頭れ吼る
 声年々る力士これをうち護りと齊一凱詞を揚る声山谷小相答へて
 勇まるとはも疎へ或ハ又牛角の勝負を果さざり一方の牛を弱きを
 其方の力士占む引分んと欲する敵の力士も聴せんと呼ぶ
 其の苑の四方を遠ると相撲の行司は彷彿さかてる勝負は牛の雙
 方の力士も和譚と大勢入る推隔辛くあ引分る牛共を食飽
 くと送は突んと走り鬼を力士も段を旋しと敢又闘いせむ見小牛
 摩糸を引融して牽く昔処に到るる両牛欣欣然と自負するのみ似る
 氣色あり送は肩の故をく肩の三男と云ふるべし。これが這數十番
 勝負の間は觀者宛酔るが如く惘然として食を忘れ愕然として膽を落し

日の傾くを覺き奇に妙へと稱る声は彼颯々鳴る海の如く又遠山の雷
 ばくみ似たり實は是北國中の比名物宇内の一大奇觀也。この牛の角突の
 勢は未だこの角の左に詳る。のり程小犬田小文五只の幾番も闘牛を觀ぐ且
 驚死且感現を智の畜生も敵あまの段あり史記云角触の七九
 義をあら會得せり奇妙小七と嘆賞まれ磯九郎微笑く某るる角
 突を今茲に二ひ銃つれども其あつと云ふ事。これ牛の主の角突の前
 月よの朝夕神厨燈燭を献りて牛の捷を祈り其の隨ふ勝得る歸れば
 濁酒を醸餅を搗く賀席を因死の村中の老弱を送る招き管待を
 せり。この角突は牛の敵の牛を後々も認忘れれ大約この二十村ら
 深雪鄰郡も増せ山里も推略能徑と陝死処よりこれ小よ米
 粟を肩に柴は新を肩に牛と牛の仍遭る途を譲る由るもこの角突果て

のちのまひ 後肩方牛の也。うろく敵の勝牛にあふた。頭を縮め立駐してこれを避む。
 とのこま。又雙方甲乙する。牛のあつと。いふ途を譲らむ。あまの總て牛。
 奴のまを勞せむ。くよくくの自然の勢ひを以てと。話のま小文吾の感下。
 後番ひをえる程。唯この大牛一番をけの結角と。信え方一方の逃入村の。
 角連次四尺六寸ありとの黒牛の骨逞く。脂満く。磨き毛の澤ハ現天。
 鷲絨は異る。まの角の長く。鋭は彼石劍を欺く。一又一方ハ虫亀村の。
 須本太牛高サハ敵の牛小優て四尺七八寸ありとの連錢茸毛との。此。
 めた方の雜毛ま。鱗に似る。その角ハ鳥屋を欺。形ハ犂牛ハ敵。下。
 眼ハ此銅の鈴と怪し。蹄ハ冷る。鐵に似る。實ハ象駝も伏せ。死勢ハ。
 あり人愈これを見。く旬月を洗。目と。驚さ。は。登時磯九郎。又小文。
 五日耳く。や。あ。須本太牛ハ龍種。初。あ。牛主の家。ま。逞。た。牝牛。

ありけ。一稔夏の比。家の牛奴。これ。其。新。肩。せん。と。牽。く。深山。小。赴。
 び。牛。を。水。澤。の。傍。り。お。る。樹。下。に。敷。糸。置。た。る。男。の。彼。此。と。け。入。り。て。終。日。此。を。
 刈。る。程。小。澤。の。中。より。雲。起。り。て。晦。暎。と。く。黒。白。と。う。ろ。く。牛。奴。ハ。慄。慄。ひ。く。
 あ。ま。の。ふ。と。む。ろ。の。小。船。く。樹。蔭。ハ。走。馳。れ。く。雨。を。避。ん。と。ま。る。程。は。且。く。く。雲。
 霧。の。り。澤。邊。ハ。お。ろ。く。牛。を。る。ま。聊。異。る。る。も。あ。る。但。龍。涎。の。如。た。の。流。
 け。牛。の。ほ。ろ。と。り。あ。り。と。龍。の。精。を。一。是。よ。り。て。その。牝。牛。孕。む。五。月。満。て。
 産。る。犢。ハ。今。閉。合。ま。る。彼。牛。ハ。現。形。體。の。大。死。ま。る。面。魂。の。猛。死。ハ。い。ら。見。
 多。雜。毛。の。鱗。に。似。る。是。龍。種。ま。る。當。國。の。守。長。尾。殿。緯。の。よ。を。信。
 食。々。件。の。牛。を。徴。れ。く。も。牛。主。惜。ま。進。ま。る。今。茲。ハ。五。六。歳。あ。る。る。べ。つ。
 ら。ん。け。の。壯。觀。ハ。只。是。の。意。を。認。く。ま。せ。ぬ。と。の。ま。小。文。吾。微。笑。く。あ。の。牛。の。
 異。様。ま。る。龍。種。と。の。説。ハ。と。信。ら。れ。ぬ。と。る。現。怪。有。の。奇。物。ハ。又。敵。の。



牛力士

牛力士

牛王

自若と云
小文吾暴
牛と駐む



牛力士

うい

小文吾

牛王

牛王

討て逃歸ると須本太の爲脱と甘奮直の追蒐るを力士ホ透さるを携
 著く捕捕んとくれば須本太弥怒狂て角を突被け空きるを投籠り反
 倒を勢以當りてこれ技の熟る力士ホ駭駭に辟易く東へ碎れ西へ
 靡く周章大なるをけり然程は須本太の角連次を索難て昇登に
 虐るるのこれ四方に狂巡る人をも物も當るに任と角を搦り投屠る
 猛威は怖る群集の老弱東西は奔走南北は逃迷へ出茶屋酒店
 果子蕎麥の牀几葭竹簾を踏渡さるる只膽を鍊ま可かれば小文五口と
 磯九郎の逃る衆人隔られて送ま索る惶もあつた然ければ小文五口此も
 騒ぐ氣色多し岡の下より小松の邊に磯九郎と俟程は突然と走り來る須
 本太小文五口を搦んとするを肉りと反と角を搦り捕首る畢竟小文五口
 暴牛と推駐めく後の話説のふれをぞぞ第八輯の解分るを聴絲のり。

曲亭主人曰這個の鬪牛の光景は越後魚沼郡塩澤の里長鈴木牧之が庚辰の
 春二月廿五日彼地にお到りて目撃する圖説の由より抑鬪牛の一奇事は越後雪譜
 中の載るのれども毎歳筆研筆研身めくも創る小違ひも且老歩旅の
 散の故のまご彼州に遊べれる事足る歳月を歴るの故の故の故の企
 望を空くせとぞ言のめ及ぼる。寫真の圖を卷の五の筒端に見えたる
 又曰予が著くる冊子物語の三十年及ぼるの刻板若干散失之余
 此の故を長く刷出さるるあり。刻板をあらざる未めく足らばを補刻し予に
 校訂を乞ふと恣小画を易文を衍脱して再刷するのめと皆ぬ所云括頭巾
 縮緬紙衣化競丑三鐘の他は不あべ。あまの予が名跡ありとも補刻を
 予が校訂を経むと他人のも成まるのめり看官の爲ふのこのりをのめ。
 里見八犬傳第七輯卷之七 終

○著作堂手稿里見八犬傳第七輯画者筆二目次

出像 卷一 二 三 四
并卷五 鬪牛圖

溪齋英泉 

出像 卷五 六 七
并簡端有像一頁

柳川重宣 

淨書 卷一 二 四 五 六
卷三 七

筑波 仙橋 金川

○著作堂新舊国字绣像小説涌泉堂藏版畧目

里見八犬傳 初輯第六輯迄
三十一卷既行

家傳神女湯 婦人ちのみち
近年世に茶種多し...
精製奇應丸 大包代式茶 中包代及平 包代平
熊膽黒九子 多しの汁...
婦人の妙茶 一包代十四包 半包代三十包
製茶 神明神下同朋町東横町 本家瀧澤氏
弘所 元飯島中坂下南側 芳高 丸泥 氏の
取次 弘所横山町三丁目 賣茶店 大坂 及 半茶

同 第七輯 本編七冊
あの度出版

勸善常世物語 全五冊別人補列の
本より依之舊本
と同の...
右曲亭翁半世の才力と揮毫の新奇八犬傳の伯仲を死後繪入冊子物語之涌泉堂謹識

南總里見八犬傳第八輯 八犬傳一部の小説自後二輯より
結局大團圓に至るべし 来刃の春出版

尼子九牛一毛傳初輯 八犬傳満尾の後引つた彫刻せん
あふ翁をかこむの遠くを刊行せん

神功皇后 神儼 神明湯 一包 價百 鈞
壹廻り 價銀六 友

本家調合所 大坂心齋橋筋...
京都 出店 三条通東洞院東へ入
江戸 出店 小傳馬町三丁目 丁子屋平兵衛

文政十三年 江戸書林 小傳馬町三丁目 丁子屋平兵衛
寅正月發行 大坂書林 心齋橋筋博労町地入 河内屋長兵衛



七編

秋野

七角

院